

色内銀行街

色内通りとの交差点からの日銀通り沿いの眺めは近代都市の歴史を物語っています。半径約 500 メートルの範囲にある小樽を北の経済中心地に仕上げた名門銀行の建物群は日本の近代建築の粋を集めています。当時の 25 棟の銀行建物のうち 10 棟が残っており、その一部は 20 世紀初頭の日本の一流建築家によって設計されました。

新たな金融フロンティア

小樽最初の金融機関は 19 世紀後半の「ニシンのゴールドラッシュ」の際に流入した漁師や富を求める人々に対応した金貸しと質屋でした。1897 年までに小樽市の年間ニシン漁獲量は 9 万トン近くになり、市の人口は明治時代（1868 年-1912 年）の初めの約 2,000 人から 1920 年代には 10 万人以上に増加しました。この急速な成長により政府の規制下にある大規模な銀行の必要性が生じました。

三井銀行は北海道に初めて進出した銀行で 1876 年に函館に支店を、1880 年には小樽に支店を開設しました。三井銀行は 1882 年に日本銀行が設立されるまで北海道開発のための政府資金を扱っていました。銀行は貸金業者よりも低い金利で融資を提供し、紙幣と同等の価値を持つ小切手を発行し、国際貿易業者に外貨両替サービスを提供することで小樽の新興経済に貢献しました。

日本近代建築のショーケース

銀行の数は 1887 年の 3 行から 1897 年には 10 行、1920 年代半ばには 25 行へと急速に増加し、小樽は北海道経済の中心地になりました。現存する最古の銀行建築は 1893 年に堺町通りに完成した第百十三国立銀行小樽支店です。和と洋が融合した現存する珍しい倉庫型銀行です。

20 世紀初頭、日本の銀行は富、誠実さ、安定性を表現するために古典的なヨーロッパの建築様式を採用しました。明治政府が海外の通貨と金融システムを研究するにつれて、日本の主要な建築家もインスピレーションを求めてヨーロッパやアメリカに目を向けました。20 世紀初頭の最も著名な建築家 4 人は現在の東京大学で英国人建築家ジョサイア・コンドル（1852 年-1920 年）に師事しました。彼らは日銀通り沿いに小樽日本銀行（1912 年）、と色内通りに三井銀行小樽支店（1927 年）を建設しました。

初期の銀行建築とは対照的に 1920 年代に建てられた北海道拓殖銀行（1923 年）、三菱銀行（1924 年）、第一銀行（1924 年）の小樽支店などはシンプルな柱と最小限の装飾を備えた滑らかなファサードが特徴です。これらは、当時ヨーロッパやアメリカで公共の建物や施設向けに人

気があった、抑制された新古典主義スタイルの典型的な例です。

歴史ある街並みを救った財政不況

小樽の当時の銀行建物の多くは数々の環境的・歴史的要因に救われました。1 つはこの都市の歴史を通じて比較的地震がなかったこと、そして第二次世界大戦中に空襲による大きなダメージがなかったことです。

街の経済力の衰退も保存に貢献しました。20 世紀にこの国のエネルギー需要の主流が石炭から石油に代わり、小樽は石炭出荷港としての地位を失いました。そのため 1960 年代に小樽から多くの金融機関や商社が撤退し、重厚な建物は空き家となりました。経済が繁栄し続けていたらより現代的なスタイルの新しい建物に建て替えられたかもしれません。ある意味、小樽の財政悪化が色内地区の銀行を救ったのです。